



Title	自閉性障害者の被服行動に関する研究 ~ 保護者に対する聞き取り調査をもとに ~
Author(s)	谷, 美緒子
Citation	教育実践総合センター紀要, 3, pp.105-109; 2004
Issue Date	2004-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/26071">http://hdl.handle.net/10069/26071</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-27T21:35:29Z

# 自閉性障害者の被服行動に関する研究

～保護者に対する聞き取り調査をもとに～

長崎県立桜が丘養護学校 教諭 谷 美緒子

## I 研究目的

被服とは、人間が身につけるすべてのもののことを指す。被服行動とは、被服に関する人間の行動、購入・消費・廃棄の諸行動を含む被服に関する人間の行動のことである。

近年、身だしなみを整えることはもちろんのこと、「おしゃれをする」ことが若者の間で広がっている。大学生を対象におしゃれに対する意識調査を行ったところ、おしゃれは自己主張であると考えていることがわかった。(太田・川谷：1989、河合：1989、鮎田・都築：1989、河合：1990、藤井：1994) また、最近では学生の間でファッションに携わる活動が活発になってきている。(生野：2000)

しかし、障害者の場合、本人からの動機が弱かったり、保護者が外見を気にして被服を選んでやってしまったりするために、身だしなみを整える力自体が育ちにくいといわれている。(飯田：1998) そのために、おしゃれをすることはより一層困難なことだといえる。

学校教育における衣生活教育は、衛生面の管理、縫製という内容が多く、子ども達が被服を選択する際の情報源としての役割を果たしておらず、衣生活教育と実際の生活が結びついていないために、結果的に学習としての効果が得られていない。(軍司・吉田：1996) このことは障害児教育も例外ではない。そこで、被服の選択という項目を学校教育に取り入れ、本人にとってより豊かな生活を形成するための一端を担いたいと考える。

そのために、障害者の衣生活の実態をつかみたい。まずは、独特な障害の特徴をもつ自閉性障害者に対象を絞り、保護者への聞き取り調査を通して、衣生活の実態を明らかにしたい。

## II 自閉性障害者の被服行動に関する聞き取り調査

### 1 方法

対象者は日本自閉症協会長崎県支部に属している 18 歳から 40 歳までの会員の保護者 43 名であるが、実際は、男性 35 名、女性 7 名、計 42 名（双子が 1 組含まれている。）の自閉性障害者の被服行動の実態について、41 名の保護者に対して聞き取り調査を行った。対象者の現在の所属としては、多い順に施設通所、施設入所、デイサービス利用、一般就労、在宅であった。

主な調査内容は、次の項目であった。

- (1) 日常好んで身につける被服の有無
- (2) 被服を着用する時、中心となって被服を選択する人
- (3) 被服を購入する時、中心となって被服を選択する人
- (4) 周囲からの影響と被服行動の形成
- (5) おしゃれをする意識を育てる必要性

### 2 結果

- (1) 日常好んで身につける被服の有無

身につけているものがあると答えた人は、全体の 90%にあたる 38 名であった。被服

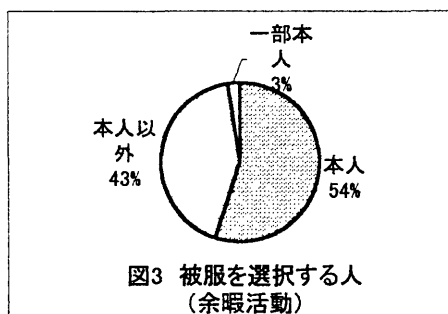
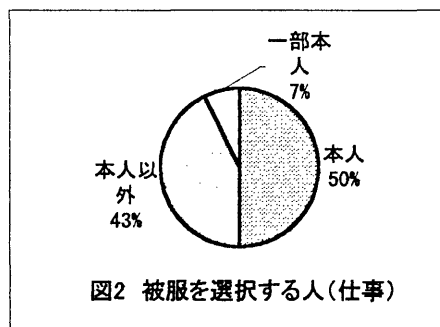
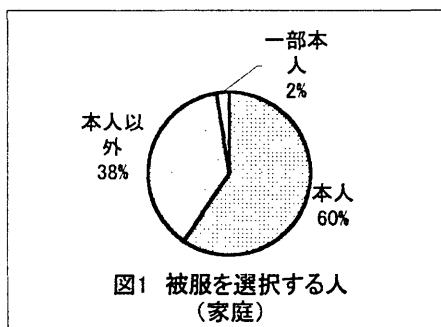
の種類の中では洋服が一番多かった。通勤や余暇の服装の区別はない人が多く、上衣と下衣の組み合わせ方も基本的には決まっている。洋服の形について、上衣は丸襟のものを好む人が半数をしめていた。ワイシャツはあまり好まれておらず、着る人も少なかった。一般就労者と福祉的就労者を比較すると、一般就労者の方がワイシャツを着る人が多かった。その他には、同じ洋服にこだわり、毎日のように身につけたり、柄や色が似たようなものを交互に身につけていたりしている様子がみられた。

日常身につけているものの中で、その他には、バッグ、靴、帽子、その他の順番で身につけているものがあると答えた。バッグを好んで身につけていると答えた人は20名いた。1つのバッグを外出する時には必ず持っているという人もいれば、外出先によって変えている人もいた。靴については10名いた。1足を履きつぶしている人がほとんどで、外出先によって変えている人は1名であった。帽子と答えた人は12名で、種類は全員野球帽子であった。その他には、ハンカチ、かき、時計などがみられた。

また、よく身につけている被服がある人38名の中で、被服自体へのこだわりがみられると答えた人は15名(33%)いた。具体的な被服の種類や行動の様子はそれぞれによって異なっていた。

## (2) 被服を着用する時、中心となって被服を選択する人

着用場面を家庭、仕事、余暇活動の3つの場面に分けてたずねた。

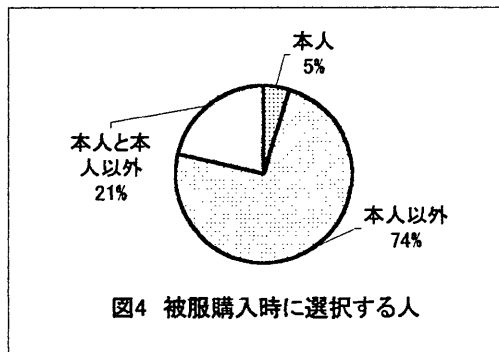


3つの図を比較すると、生活場面によって被服を選択する人の割合はあまり変わっていないが、通所・通勤場面が割合が低く、家庭場面が高かった。

本人が選択している人に選び始めた時期は、青年期前期が9名と一番多かった。次いで幼児期が5名であった。選び始めたきっかけとしては、「保護者も意識することなく自然と被服を選択することができるようになっていた」と答えた人が12名であった。その他には、「寄宿舍・寮生活を始めてから」、「自分のダンスをもってから」、「仕事を始めてから」、「習慣化した」、という回答があった。

また本人以外が選択していない人についてその理由を尋ねると、①本人の興味のなさ、②保護者が本人に対する介助の1つとして被服の準備が含まれてしまっていること、をあげていた。

(3) 被服を購入する時、中心となって被服を選択する人



購入する時本人が中心となって選択すると答えた人は、5% (2名) であった。しかし、この2名は施設入所または通勤寮に住んでいるため、選択する様子についてはわからなかった。

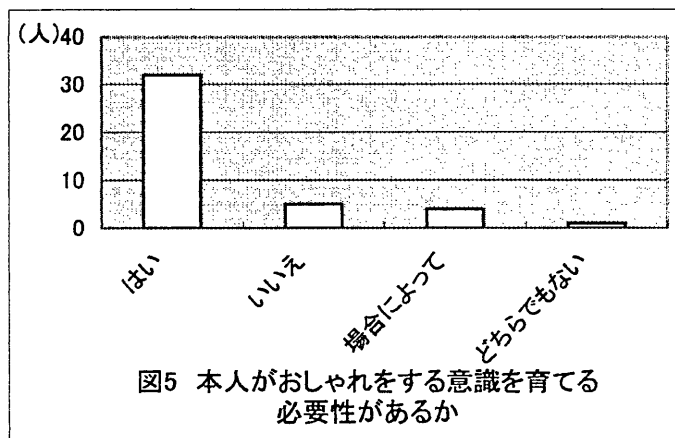
本人以外と答えた人は、74% (31名) であった。本人以外とは、主に保護者のことであり、中には施設の職員やきょうだいがみられた。購入の形態としては、本人と一緒に買い物に行くと、保護者が購入したい被服の形を絞り、本人がデザインや色を選択するが、なかなか本人が買い物に来ないため、保護者がすべて選択している。

被服を購入したいと自分から主張した例は3例あったが、いつも自分から言うのではなく、自分がほしい物がある時にのみ主張していた。

(4) 周囲からの影響と被服行動の形成

被服が掲載された雑誌等を見てその身なりを真似したり、芸能人の身なりをまねしたりしていた人は2名いたが、そのうち1名は雑誌に自分の腕時計と同じものを発見し喜んだということで、真似をしたいという気持ちはほとんどみられなかった。

(5) おしゃれをする意識を育てる必要性



おしゃれをする意識を育てたいと答えた人は 32 名であった。この中で保護者もおしゃれをすることが好きな人は 28 名いた。また育て始める時期としては、幼児期を上げた人が一番多く 16 名いた。その理由としては、本人がおしゃれをする意識を持つよう、本人の興味・関心がない時期からかっこよさを伝えたい、ということだった。育てていく場所としては、様々な機関をあげた人が 19 名いた。(様々な機関とは、家庭や本人が関わるすべての機関のことである。)

育てる必要がないと答えた理由としては、保護者自体がおしゃれをすることが嫌いだから、本人があるがままでいいから、めんどくさい、機能性を重視したいからなどという意見があげられていた。

### Ⅲ 考察

日常好んで身につけている被服については洋服が多かった。これは、洋服は「第 2 の皮膚」(神山：1985)と言われ、身体に最も近いために本人の好みが見われやすいと言える。その特徴は個人によって異なっていたが、上衣についてはトレーナーや T シャツといった首周りをしめつけない、着脱しやすいものが多かった。これは、①手先が不器用、②幼い頃から、かぶり型の洋服の経験が少ないということ、③本人がその感触や大きさを気に入っていること、が原因として考えられる。②と関連して、聞き取り調査の中で、知的障害は軽度で理解力が高いが、ゴム入りのズボンしかはいたことがない人がいるという話も聞かれた。そのため、様々な洋服の形を経験させることが被服行動を形成する時に大切であると考えられる。

また、日常好んで身につけている被服を調査することを通して、洋服をはじめ、他の被服に対しても、こだわりをもっているところがみられた。飯田(1998)によると、特定の衣服(被服)へのこだわりの原因は、①本人に切迫した問題意識がない、②同一性保持のこだわりがある、③感覚障害を伴っているということをあげているが、この調査の中でも、この 3 つの原因によるこだわりではないかと考えられた。

着用する時に中心となって選択する人については、家庭、通勤、余暇活動の 3 つの場面にわけてみてみたが、あまり大きな差はみられなかったが、家庭場面において選択する人が若干多かった。自閉性障害をもつグニラ・ガーランド(2000)やドナ・ウィリアムズ(2000)が、自分の被服行動について記述をしているが、それによると、周囲の流行と自分の被服行動は接点が少なく、自分が好きな格好ができるということが、本人にとって一番積極的に行動することができる場所であるとわかる。家庭は他の人の目も気にすることなく本人が好きな格好ができるので、本人が自由に選択でき、自分がくつろぎたい、ゆっくりしたいという気持ちを表現していると考えられる。しかし、出勤時は、TPO を意識するために、自分で選択する機会も減るし、本人の自由な選択がなかなか確保できない。そのため、TPO にあわせて被服行動を行う機会と自分の意志で自由に選択できる機会、両者を保障し、これらの経験を積み重ねていくことで、次第に様々な場所で本人が中心となって被服行動ができるように教えていきたいと考える。

自分で選択するきっかけとして、「自分のダンスをもってから」「寮・寄宿舎生活を始めてから」というように自分で被服を管理しなくてはならない場面に出会ったことで選択ができるようになっていく。小林(1990)は、母子分離のために、自分の生活様式を確立するという事実と直接関係すると指摘しており、自分で責任をもって選択する経験が、本人

の自発性を育て、生活の主体者としての意識がされていくと考えられる。

被服を購入時、中心となって被服を選択する人は本人以外が多かった。この原因として、①新しく被服を購入する事自体へ関心を示さない、②買い物に行っても自分の気に入ったものを見に行き、購入の場にはいない、ということが考えられる。

おしゃれをする必要性については、本人にはおしゃれをする意識を育てていきたいと考えている人が 32 名いた。育てはじめる時期は幼児期から、物心つく前から「かっこいい」「かわいい」と思うような被服を着せたいという思いをもっており、保護者が本人にできるだけ、おしゃれをさせたいと願っていることがわかった。一方、おしゃれをする必要はないと答えた保護者は、機能性・実用性を重視しながら、自分の気に入ったものを使って自分を飾っていく必要があると考えていた。両者の考え方より、洋服の役割の基本を押さえながら、自分らしいおしゃれをすることを教えていくべきであるといえる。

今後は本調査の結果を受け、被服行動の事例研究や障害特性と被服行動の関係について研究を深めていき、自閉性障害者だけではなく、障害者の衣生活の充実を図るための支援について考えていきたい。

\* なお、本論文の要旨は平成 14 年 7 月に開催された第 37 回日本発達障害学会において発表した。

## 文 献

- 1) ドナ・ウィリアムズ著／河野万里子訳 (2000)：自閉症だったわたしへ. 新潮社文庫.
- 2) グニラ・ガーランド著／ニキ・リンコ訳 (2000)：ずっと「普通」になりたかった. 花風社.
- 3) 軍司和子・吉田絃子 (1996)：高等学校家庭科における衣生活内容の検討 (第 2 報) —中学生の衣生活の意識と実態. 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 45, 137-153
- 4) 藤井一枝 (1994)：女子短期大学生の着装態度、購買行動ならびにライフスタイル特性. 島根女子短期大学紀要, 32, 81-90
- 5) 鮎田崎子・都築史子 (1989)：愛媛大学生の着装に関する被服行動—教育学部男子・女子学生の場合. 愛媛大学教育実践指導センター紀要, 7, 33-46
- 6) 飯田雅子 (1998)：発達に遅れがある子どもの日常生活指導②着脱・洗面・入浴編. 学習研究社.
- 7) 生野晴美 (2000)：小・中・高等学校「家庭科」における衣生活教育とその課題—平成 10・11 年告示の学習指導要領を手掛りに—. 東京学芸大学紀要 6 部門, 52, 53-62
- 8) 河合きく (1989)：女子短大生の生活意識と被服行動に関する研究(1). 中京女子大学紀要, 23, 179-188
- 9) 河合きく (1990)：女子短大生の生活意識と被服行動に関する研究(2). 中京女子大学紀要, 24, 145-156
- 10) 小林隆児 (1990)：201 例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題. 発達の心理学と医学, 1, (4), 523-437
- 11) 神山進 (1985)：被服心理学. 光生館.
- 12) 野津哲子 (1994)：女子学生の被服行動と社会心理的特定との関係. 島根女子短期大学紀要, 32, 91-98
- 13) 太田昌子・川谷久美子 (1989)：大学生の衣生活の実態と意識—家庭科教育の視点より—. 鳴門教育大学研究紀要 (生活・健康編)